重症心身障害児(者)の骨折予防への取り組み

独立行政法人　国立病院機構　和歌山病院
医療安全管理係長　坂本樹美

和歌山病院は、和歌山県の中央に位置し、県で２番目に小さな町、美浜町にあります。病院の周辺には近畿一とも言われる松林や、太平洋に面した煙樹ヶ浜があり、緑と青に囲まれた自然豊かな場所にあります。2016 年４月に、災害に強い病棟に建て替えられました。

当院は、標榜診療科 12、収容可能病床 260 床（一般 86 床、結核 15 床、重症心身障害児(者)159 床）を有しています。呼吸器・神経疾患の専門性の高い地域医療を重視した病院として、また、障害者医療・結核など、セーフティネット医療を実現する病院としての役割を担っています。

重症心身障害児(者)は、運動不足や重力負荷不足による廃用性の骨萎縮、日照不足によるビタミンＤ産生不足、抗けいれん薬の影響による肝臓でのビタミンＤの異化亢進による不足、摂食障害による栄養不足などによる骨粗鬆症（骨脆弱性）を認めます。また、重症心身障害児(者)では四肢関節の拘縮をきたしていることが多く、上肢では肩が下垂して肘が屈曲した「W 肢位」がみられ、下肢では股関節脱臼・拘縮による「風に吹かれた変形」がよくみられます。拘縮のある関節に外力が加わった場合、関節は動かないため、てこの原理により自分では強い力を加えてないにも関わらず大きな外力が加わることとなり、骨折を生じる要因となります。

重症心身障害児(者)の施設内骨折は、年間 2～3%でみられる障害で、受傷機転が不明な症例が多いです。その要因は、患者が知的障害のため自分の受傷した骨折に関して説明ができないという点、もう一つは骨粗鬆症のため軽微な外力による骨折（脆弱骨折）となるためです。皮膚の腫脹や出血班の存在によりレントゲン検査が施行され、初めて骨折が発見されるということも少なくありません。

当院の重症心身障害児(者)病棟における、令和５年度までの骨折発生件数は、図１の通り増加傾向にありました。

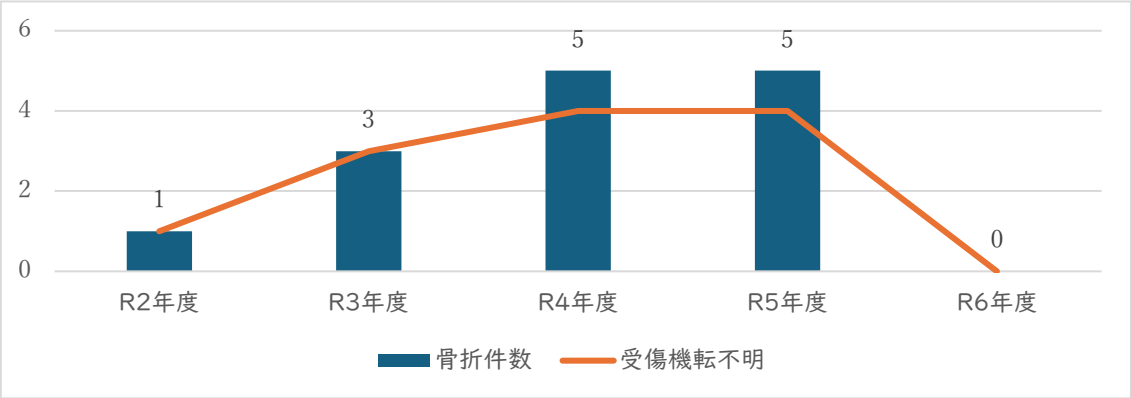
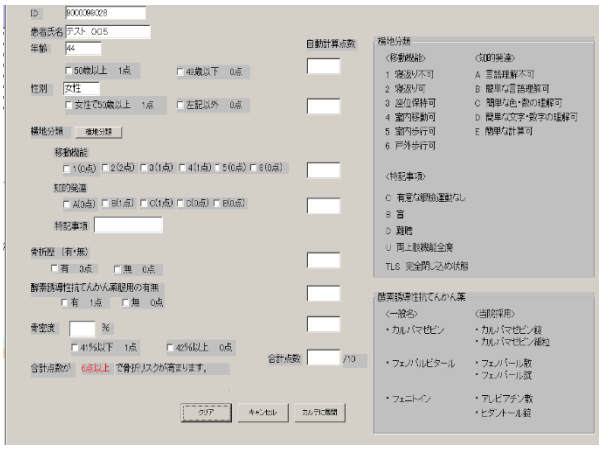
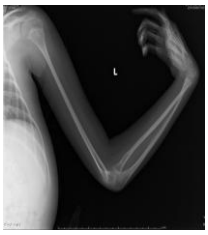


図１　重症心身障害児(者)病棟における骨折発生件数

そこで、当院では下記の重症心身障害児(者)の骨折予防への取り組み強化を行っています。

援助に関連する事項	①全介助が必要な患者は、介助者２名で更衣やおむつ交換、移乗を行う ②拘縮など患者の身体的な特徴に合わせた衣類の作成・選択を行う ③入浴時のベッドとストレッチャーの移乗はロールボードを使用
検査・処置等に関連する事項	①関節可動域の測定：１回/年、全患者、リハビリテーション科スタッフが実施・評価。結果を多職種で共有 ②リハビリテーションの実施。リハビリテーション内容は多職種で共有 ③骨密度測定：２回/年（令和５年８月から開始） ④「重症心身障害児(者)骨折リスク評価スケール」による評価２回/年（令和６年 10 月から開始）、医療安全管理マニュアルを新規作成 ※必要時、薬物治療を開始 

教育に関連する事項	①新採用者および希望者を対象に、リハビリテーション科スタッフによる「骨折予防」研修を講義と演習を交えて毎年実施 ※痩せているように見えなくても実は骨が細いことをレントゲン写真を見せ説明  ②①を録画、看護部職員（看護師・療養介助専門員・看護助手）全員視聴 ③骨折リスクが高い患者の介助方法について、病棟毎でリハビリテーション科スタッフが指導 ④各病棟でポジショニング写真撮影、新採用者や異動職員の教育に使用
リスクマネジメント部会の取り組み	令和５年度から、チーム活動として骨折予防の取り組みを開始 ①多職種（医師・薬剤師・栄養士・リハビリテーション科スタッフ・保育士・看護師）でのラウンドを行い、各部門の視点から意見交換 ②リハビリテーション科スタッフがケア介助方法等の動画を作成、各病棟で説明会を実施 例）自力で腹臥位となる患者を仰臥位に戻す時の方法・注意点 例）変形・拘縮が強い患者の更衣・おむつ交換・移乗方法と注意点 例）車いすへの移乗時、緊張が強くなる患者の移乗方法など 令和６年度もチーム活動を継続 ①多職種でのラウンド、意見交換 ②昨年度作成された動画の視聴率の確認、看護計画の確認・指導 ③動画通り注意点を守り実施できているかスタッフの技術チェック

以上の取り組み継続により、令和６年度骨折事例はありませんでした。しかし、「重症心身障害児(者)骨折リスク評価スケール」によるリスク評価の実施率が低いこと、リスク評価や骨密度結果を看護計画に反映できていない等々、まだまだ課題はあります。リスク評価と、そのリスクを認識した上での適切なケアが実践できるよう取り組みを継続していきたいです。

「重症心身障害児(者)は骨がもろくて骨折しやすい」という認識をもって日常の介護を行うだけで、かなりの骨折予防効果があると考えます。また、足先を持たない、下から支える、広い範囲を支える（点ではなく面で）、ゆっくり愛護的に行う等々、骨折を生じさせないような介護技術も重要です。職員への骨折予防に対する意識付けや適切な技術の習得のための研修や技術チェックなども継続していきたいです。

今後も職員同士のコミュニケーションの良さを生かし、多職種で協力し合い安全安楽な療養環境が提供できるよう努力し、骨折ゼロを目指したいです。